

インド、アルナチャル・プラデシュ州のモンパ民族地域における住民にとっての「山」のもつ意味

水野一晴

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

インドのアルナチャル・プラデシュ州のモンパ民族地域において、住民にとって「山」がどのような存在となっているのかを調査した。その結果、山は、モンパ民族地域において次の3つの役割を果たしていることが判明した。

1. 山は民族分布や文化、社会の境界をつくっている。アルナチャルヒマラヤ（アッサムヒマラヤ）の山脈が流通の障害物の役割を果たし、タワンモンパとディランモンパでそれぞれ独自の言語や生活習慣が発達し、両者の境界をつくっている。また、山は1962年の中国軍のモンパ地域への侵攻以来、インド軍が大規模に駐留して、自然の要塞の役割を果たしている。
2. モンパ民族が古くから信仰するボン（ボン）教の宗教的儀礼、祭式において、山が神として信仰の対象になっている。各地域はそれぞれ周辺に山の神が存在し、その神に祈り、捧げ物をする儀式、祭りが行われている。捧げ物は少女や家畜であり、それぞれの山の神に捧げるものが決まっている。ディランモンパ地域のディランゾン地区やテンバン地区では、社会的階層としての上位クランと下位クランに分かれており、このような伝統的儀礼にはそのクラン（氏族）の差が明瞭に見て取れる。
3. 山はモンパ民族にとって資源として重要であり、住民は山の森林から材を得てきた。ディラン地方では森林は3つに区分され、それぞれの使用目的も異なる。しかし、近年大量伐採によって森林破壊が顕著になり、そのため、商業伐採が禁じられたが、今でも違法伐採が続いている。住民たちもそのような森林の過度の伐採に危機感を感じるようになってきたため、伐採に代わるような現金獲得手段を考え、森林保護を進める動きが出てきた。

キーワード：アルナチャル・プラデシュ、モンパ民族、山の役割

はじめに

インドの北東部、アルナチャル・プラデシュ州は南にアッサム州、西にブータン、北にチベットがあり（図1）、22-24の民族（細分化すれば51民族）が分布し、その北西部にはモンパ民族が住んでいる。彼らはチベット系民族であり、古くからチベットとのつながりが深い。人々はチベット仏教を信仰し、その寺院が多数見られる。年間降水量（2000-2005年の平均値）はタワン（標高3025m）1610mm、ボンディラ（標高2430-2700m）1788mm、ディラン（標高1700m）約1000mmである¹⁾。タワンの冬の降水量は主に降雪である。ボンディラの年平均日最高気温は20.8℃、年平均日最低気温は6.0℃である²⁾。自然は日本と似通い、照葉樹林帯、夏緑樹林帯（ブナ帯）、針葉樹林帯からなっており、低地の農耕民、高地の牧畜民が

それぞれその自然をうまく利用し、かつて日本で見られたような里山としての森林利用が現在も見られる³⁾。

モンパ地方は山岳地域であり、各村からは周囲に山々が見渡せる。本稿はとくに州の北西部でチベットとブータンとの国境に近いモンパ地方において調査を行い、住民にとって「山」はどのような意味を持つかを分析した。調査は主に現地での参与観察と住民への聞き取りによって行った。

民族、文化、社会の境界としての「山」

モンパ民族は大きく、タワンモンパ、ディランモンパ、カラクタンモンパに分かれる。ディランモンパとカラクタンモンパは東ブータンとほぼ言語が同じであるが、タワンモンパとは言語が大きく異なる。その言語の差を生み出したのが標高

4000 m 以上の山々が連なるアルナチャルヒマラヤ（アッサムヒマラヤ）（写真1）で、古くから流通の障害になってきた。ディランモンパとタワンモンパ地域の境界はこの両地域の間にあるこの山々が作り出してきたのである。この山脈の鞍部にあたるセラ峠（標高 4200 m）（写真2）が両地域を結ぶ唯一の交通ルートで、雨季には地滑り、冬期には積雪で道路が閉鎖されることが少なくない。現在のように道路が整備され車で通行できるような時代の前には、この峠を通過しての人や物の流通は困難をきたし、それが現在の両地域の言語をはじめとした社会、文化の差異に影響してきた。それぞれの地域には他地域から移動してきた人たちが混在しているが、それでも全体として両地域には大きな差異が見られる。たとえば、両地域の言葉を比較すると、シコクビエはタワンモンパ（以下、タワン）ではコウプ Kowp あるいはクレ Khra と呼ばれるが、ディランモンパ（以下、ディラン）ではコンプ Khongpu、トウモロコシはタワンがアシュム Oshum あるいはボマ Boma、ディランがピナン Pinthang、米はタワンがデップ Dep（Depu）、ディランがクー Khu、稲はタワンがヌー Nu あるいはヌン Nun、ディランがラ Ra あるいはラハ Raha、ごはんはタワンがトッ Toh あるいはトプチェ Topcha、ディランはトチャン Tochang あるいはトシャン Toshang である。また、ソバがタワン

はキヤーボ Kyabu、ディランはグルツン Gruntsun といったぐあいにまったく言葉が異なっている。一般に、タワンモンパの言葉はディランモンパのそれと比べ、地域的に隣接する分だけチベットと共通あるいは似ているものが多い。

言語だけではない。タワン地方とディラン地方では農耕民の住居や生活スタイルも異なっている。住居に関し、ディラン地方の住居は入り口を入ると直接大きな居間に入り、そこが寝室やキッ



図1 アルナチャル・プラデシュ州の位置図



写真1 ディランの町並みと背後に見えるアルナチャルヒマラヤ（アッサムヒマラヤ）の山脈。この山脈がタワンモンパ（山脈の背後側）とディランモンパ（山脈の手前側）の民族・文化・社会の境界を生み出した。



写真2 タワンモンパ地域とディランモンパ地域の唯一の流通路が通るセラ（ゼラ）峠（標高 4200 m）。雨季の地滑り、冬期の積雪でたびたび交通が遮断される。

チンになっている場合もあるが（写真3）、タウン地方では入り口からバルコニーや玄関に入り、そこから次の入り口に入って、部屋に入る場合が多いようにみえる。つまり入り口が二重になっている（写真4）。また、ディラン地方ではトイレが家から離れてあるが、タウン地方ではトイレが住居に隣接している。タウン地方ではトイレトーパーとしてコナラの落葉を利用し、トイレの下に落とした落葉は便と一緒に、トイレが満杯になったらそれらは取り出され畑に播かれる。一方ディラン地方ではトイレトーパーとしてトウモロコシの芯を利用してきた。両地域の共通点としては、ディラン地方もタウン地方も家の入り口は小さくして、ゾンビ（ロランゲ）が入りにくくしてある。モンパ地方で信じられているゾンビは背筋をびんと伸ばして体を曲げられないので、ゾンビが入り口で頭がつかえて入れないようにしてあるのだ。また、入り口の床の部分も木の板で2段階になっていて、下を見ることができないゾンビが足下をひっかけて入りにくいようにしてある（写真4）。そして、大きな家にはたいてい礼拝室があり、ディラン地方の場合、礼拝室をチョイサム Choisam（写真5）と呼んでいる。炊事場はタブツァン Thaptsang と呼んでいるが（写真6）、どこの家庭の炊事場もモモ（水餃子）を作るための蒸し器など使用目的ごとにたくさんの鍋やお玉がある。特にタウン地方では、炉の上層に穀物倉庫がある場合が多く、煙が2階の穀物倉庫に立ち上って虫が付きにくくしてある（写真7）。住居の屋根の下に木製の男根を模した物が吊り下げたのも両地域で共通だが（写真8）、それはタウンモンパではナクタン Naktong、ディランモンパではラクタン Laktong と呼ばれ（女性の前ではこの言葉を口にしない）、悪霊や凶眼から守られるために利用されている。

また、1962年の中国軍のモンパ地域への侵攻以来、この山脈は一つの大きな要塞の役割を果たし、セラ峠の両側斜面にはインド軍が大規模に駐留して、軍事基地を作り、防衛の要になっている。このように山は民族、文化、社会の「境界」として大きな役割を果たしてきたのである。

宗教的儀礼、祭式における「山」

ボン（ボン）Bon 教はチベットで古代から続く民族宗教で、土着的要素と密接な関連を持ちながら独自の高度な数理体系を築き上げていき、チベット仏教のニンマ派（古派）とは相互に影響し合って発展してきた。両者は伝説と儀礼にかかわる古い材料を集めている点やゾクチェンという瞑想が伝えられている点で共通する。仏教とボン教は対立するどころか、仏教徒は人々が興味を持ちそうな土地の信仰は何でも取り入れ、一方、ボン教も仏教の理論と実践を可能な限り取り入れ、ボン教徒は仏教の導入から数百年の間に教義と実践を発展させ続けていた⁴⁾。

モンパ地方では12世紀以降に住民がチベット仏教に転向し始めたものの、古くからの伝統的なボン教（ディランモンパ語でボンプ Bonpu と呼ばれる）への信仰をも持ち続けた⁵⁾。ボン教の宗教儀礼の際には、住民から畏怖の念で見られていたシャーマンが儀式や捧げ物を取り行った⁵⁾。ディラン地方には伝統的に住民が山の神への捧げ物を行うボン教の儀式・お祭りがある。ディラン地方のディランゾン村およびイエワン村などの周辺村ではチイスソイシ Chisesoiyshi と呼ばれる儀式・お祭りが、毎年、夏（8月）に2日間、冬（12月の終わり）に1日行われている。以下、村人からの聞き取りによる。

チイスソイシの際には5つの上位クラン（「カンタンブ（太い骨）Khangtangphu」と呼ばれる）が1人ずつシャーマンを呼び、下位クラン（「ギラ Gilla」と呼ばれる）はまとめて3人のシャーマンを呼び、計8人のシャーマンが儀式にやってくる。これらのシャーマンはこの地区の村に住んでいる者で、世襲制で一番下の息子がシャーマンを継ぐことになっている。彼らは髪を切れないので長い髪をしている。

シャーマンは夕方5時から夜9時まで3つの山の神を呼び寄せて祈り、儀式の捧げ物をする。アタドゥンブ Attadungphu（写真9）という山の神（男）には1人の少女と1頭の牛、アタバングレ Atabangle（写真10）という神（男）には1人の少女と1頭の牛、ジョムラ Jomula という山の女神には1匹の羊が捧げられる。少女は12歳以下の未婚の女性に限られる。アタバングレの山の頂付近では大きな岩の割れ目から水が湧き出し、



写真3 ディラン地方（テンバン村）の住居の居間。入り口から直接居間に入る。



写真4 タウン地方（チャクサム村）の住居。最初の入り口を入れてバルコニーや玄関を経由して、次の入り口から居間に入る。ディラン地方もタウン地方も入り口は小さく、足下は段差を作ってゾンビが入りにくくしてある。



写真5 一般家庭にある礼拝室（タウン地方、カールドウン村）



写真6 一般家庭の炊事場（タウン地方、チャクサム村）。タウン地方、ディラン地方ともに、たいていの家の場合、モモ（水餃子）を作る蒸し器などたくさんの鍋やお玉がある。



写真7 居間の炉の上の部屋は倉庫になっていて、煙で虫が穀物に付きにくくしてある（タウン地方、カールドウン村）



写真8 モンパ地方では悪霊や凶眼から守られるために住居の屋根の下に木製の男根を模した物を吊り下げる風習がある。

150 m くらい下の岩に打ち付けてドウンドウンとドラムのような音がするという。アタドゥンプにも同様に 100 m もの滝があって同じようにドウンドウンと音がするという。人々は体に響くドラムのようなその音から神が生み出した自然のパワーを感じ取るようだ。アタドゥンプとアタバングレの山はディランゾンから南の方角に位置し、さらにジョムラはカラクタン地方のモオシンの近くにある山である。

このチスソイシの際には、かつて上位クランと下位クランの間にあった大きな社会的格差が現在も垣間見られる。伝統的に上位クランの人々は椅子に座り、下位クランの人は床に座るのである。かつては通婚も許されなかったクランの差であるが徐々にその差は減ってきている。現在、下位クランの人々は上位クランの人々に労働力を提供するなどの差異は残っているが、とくに伝統的儀式においてその差が明瞭に見られる。

一方、ディラン地方のテンバン村（グントウン村など付近の村も含む）においても同様なボン教の祭式、ラスシ Lhasushi と呼ばれる山の神への捧げ物を行う儀式がある。毎年簡素なものが行われているが、村をあげての大がかりなものは 6 年に 1 回開催される（2011 年 2 月 20-23 日に 6 年ぶりに行われた）。ラスシの儀式では、5 つの山の神に捧げ物を行う。それに関するテンバン村に伝わる伝説は村人（村の兼業僧他）からの聞き取りによれば次のようである。

チャチャニー Chachani と呼ばれる二人の兄弟の神がテンバンの地に降りてきた。そのころ地上には人間が住んでいなかった。また、神もいなかった。兄が弟に「おまえが人間になるか」と問うたところ、弟は兄に「兄さんこそ人間になるべきでしょう」と答えた。けっきょく、兄がジョウォーディ Jowhodi という名の神になって、弟が人間の王になることになる。

多くの年月がたって、王になった弟の子孫の、二人の兄弟が王になった。二人は叔父を殺した。その際に、叔父は二人に「もし、私を殺すなら、人々がおまえたちを殺すことになるだろう」と言い残していった。

さらに何年も経て、二人の兄弟王は現在のアッサムの地から税を徴収した。しかし、彼ら

とアッサムの人々の間には言葉のギャップがあった。そのせいで二人の王はアッサムの人々に殺されることになる。その後、長年にわたって王が不在であった。そこで、従者（兵士）のブートモンパの人々は新しい王を探すことになる。

この伝説ではブートモンパの人々が王を探すごとで終わっているが、別の伝説でブートモンパの人々がチベットで王となるべき人を見つけ、その王がテンバン村東方のカールウォン Khorwong（ウォングメイ・カール Wongmai Khar）にやって来たことになっている。実際にはチベット（吐蕃王朝）の第 41 代王（在位期間 815-841）ティ・レルパチェン（ティツク・デツェン）が在位していたとき、王の背徳の兄弟ラン・ダルマ（ダルマ・ウィドゥムテン）がティ・レルパチェンを暗殺して王になることをもくろみ、その前にもう一人の兄弟ラセ・ツァンマが邪魔であったため、占い師と預言者に多額の賄賂を渡して王に嘘を告げるように命じ、その結果ラセ・ツァンマはモンユル（モンパの国）に 836 A.D. に追放されたのであった⁶⁾。ただし、吐蕃王国の歴代王のうち、初代から 26 代までは実在が確認されておらず、チベット人の歴史家が世代数を水増ししている可能性が高く、七世紀の王を 30 代目前後と数えているが、実は 14 代目くらいであったと考えられる⁷⁾。その後、ラン・ダルマはティ・レルパチェンを暗殺し、第 42 代チベット王になった。このモンパ地方に追放されたラセ・ツァンマの一族子孫が最初にカールウォン（ウォングメイ・カール）、14 世紀頃にはディルキゾン（ゾンは砦という意味）に移住した⁸⁾。このディルキゾンの建設年代（14 世紀頃）は著者が採取した遺物の炭を放射性年代測定によって計測した結果に基づく。さらに 17-18 世紀頃にはテンバンゾンに移住した（テンバンゾンの建設年代も同様の計測に基づく）。以下、テンバン村の住民からの聞き取りによれば、その王族一族の子孫の 4 兄弟（長男コチル Khochilu、次男シャルチョッパ Sharchokpa、三男アタジェブ Attajepu、四男ディルキッパ Dirkipa）が現在のテンバン地域の 4 つのクラン（ディランモンパ語ではツァン Tsan）のルーツになり、「バプー」（ヒンディー語で「父」という意味）と呼ばれる 4 つの上位クラ

ンとなったとされる。そして、その使用人の子孫がギラと呼ばれる下位クランとなり、そして従者（兵士）はブートモンパ Boot Monpa（ディランモンパの東側に住む民族で言語はシェルドックペン Sherdukpens と同じ）であって、ゾン建設に従事した。さらにテンバンゾンの王一族の一部がディランゾン地区に移住したのがディランゾン地区の上位クランを形成している（例えば、テンバンゾンの上位クランのシャルチョッパの人々の一部がディランゾン地区に移住したのがダウンカルパと

いう上位クランの起源）。

この伝説で出てくるジョウオーディ Jowhodi (写真 11) という神が、ラスシで儀式的捧げ物をする 5 つの神のうちの 1 つである。2 つ目の神はプラチョン Phulachung (写真 11) という名で、パプー（上位クラン）のための神となっている。3 つ目はドンムリッヒ Dumrihi (写真 12) で、4 つ目の神はタン Tang と呼ばれる火事や洪水などの災害を支配する神であり、別名をサラシリー Salasily という。最後に、アマジョム Amajomhu と呼ばれ

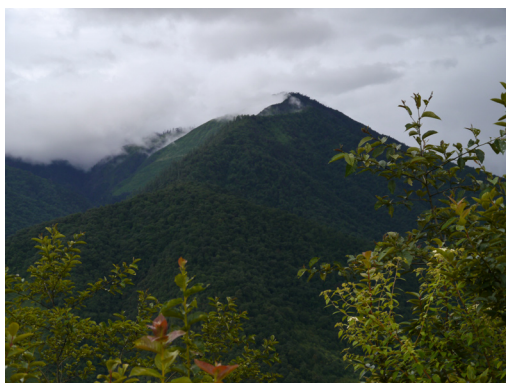


写真 9 ディラン地方のディランゾン村で行われるボン教の儀式・祭り、チスソイシにおいて祈りと儀式的捧げ物をするアタドゥンプという名の山の神（男）。1 人の少女と 1 頭の牛が捧げられる。



写真 10 アタバングレという名の山の神（男）。1 人の少女と 1 頭の牛が捧げられる。



写真 11 テンバン村のボン教の儀式・祭り、ラスシの際、捧げ物をする 5 つの山の神のうちの 1 つジョウオーディとプラチョンという名の山の神。プラチョンはパプー（上位クラン）のための神となっている。



写真 12 ドンムリッヒという名の山の神。テンバンゾンの西側の城塞の門から見たところ。

る、ギラ（下位クラン）のための神である。ジョウオーディ、プラチョン、ドンムリッヒの山はテンバン村から姿が見え、ドンムリッヒはテンバン村のすぐ背後の山であるが、タンとアマジョムは見えず、アマジョムはブータンにある山であるという。

ラスシの時には僧（村に住むミナックパラマあるいはナッパラマと呼ばれる兼業僧）がチベット仏教の経典を詠みながら、すべての山の神に祈り、シャーマンはタン（サラシリー）の山の神にのみ祈る（写真13）。それぞれの山の神に捧げられる家畜は異なっている。ジョウオーディの山の神には羊、プラチョンにはミトウン（モンパ語でメンチャ）、タン（サラシリー）には赤い雌牛と子供の雄牛が、アマジョムにはヤギが生きのまま捧げられ、儀式が行われた後は、家畜は殺されることなくそのまま放たれる（写真14）。

ブートモンパの民族はシャーマニズム、アニミズムを信仰する民族であり、ラスシの儀式の際は、ブートモンパから決まったシャーマンが呼び寄せられる。このラスシを司るシャーマンが死ぬと、バプー（上位クラン）が占いで新しいシャーマンを選ぶ。

ブラミ Phrami と呼ばれるシャーマン（シャーマンはユーミン Yumin 他何種類にも分かれている）が山の神を呼び寄せ、山の神に家畜を捧げる儀式を行う。（写真15）。その脇にはその助手、ツァングメン Tsangmein がいて、そのまわりをプロパ Bropa（男性）とプロム Burmu（女性）と呼ばれる踊り子が舞う（写真13、15）。シャーマンは髪の毛を切れないため、二つの角が出ているような帽子の中にその長髪を入れている。シャーマンは特別な言葉で村の歴史を詠し、それを助手のツァングメンが住民に訳して伝える。その後、シャーマンが各家庭を回る。シャーマンは炉から火の付いた炭を1つ取り出し、持参したかごの中に入れ、その後に炉の火に水をかける。そして、その家族がシャーマンにバターやチーズなどのお礼をし、シャーマンは次の家へと向かうのである。この儀式はシャーマンが火事などの災害を支配する山の神タンに対して祈っていることに関連して行われる。

ラスシの儀式・祭りは5日間にわたっておこなわれるが、4つの上位クラン「バプー」の人々は

クランごとに神への捧げ物を置いた祭壇の前に座り（写真16）、その後方に下位クラン「ギラ」の人々が座っている（写真17）。

資源としての「山」

モンパ地方では、森林限界はセラ峠の場合、タワン側（北側）の北向き斜面が3900 mで、南向き斜面が4050 mであり、ディラン側（南側）の南西向き斜面が4140 mで、森林限界を構成する樹種はワン・シンと呼ばれるモミの木（*Abies spectabilis*）である。標高4000 m以上には高山植物が分布し、雨季の6-8月には高山植物が開花している。ディラン地方では、その森林が住民によって三種類に区分されている。それは落葉を集める森林である「ソエバシン」（写真18）、薪を集める森林である「ボロン」（写真18）、そして建材を集めたり、狩猟を行う深い森「ムーン」（写真19）である。モンパ地方の主要樹種23種を見ると、その地方名はディランモンパとタワンモンパでほとんど同じであり、異なるのはディラン地方でベツナンシン、タワン地方でパイシンと呼ばれる *Quercus lanata* とディラン地方でパイナンシン（ベナンシン）、タワン地方でパシンと呼ばれる *Quercus griffithii* 他（いくつかの落葉性コナラ林の総称）のどちらもコナラ林のみだということだ。ディランモンパとタワンモンパの言葉はほとんど異なる中でこの高い共通性には驚かされる。なぜ、樹木に関し両地域で名前の共通性が高いのかという理由に関してはわからなかった。

住民は村の畑の接するところを人為的にコナラの純林にして、その落葉を農地に利用してきた。それは、肥料として、また雑草の生育の抑制のため、さらには雨季の土壌流出を防ぐために用いられた（写真20）。コナラ林にヒマラヤゴヨウなどが生育するとそれが大きくなる前に刈り取ってコナラの純林にする。

「ボロン」の森林は私有地の場合、原則として所有者のみ樹木伐採や薪を採集することが可能で、他人でも（同一クラン、別のクランに限らず）所有者の許可が得られれば薪の採集が可能である。クラン共有地の場合、そのクランの人たちは薪を許可無く採取できるが、建材利用などで大量の木材を伐採するときには、そのクランの首長から許可を得る必要がある。クラン共有地では、別



写真 13 ラスシの時には僧（写真右端）がチベット仏教の經典を詠みながら、すべての山の神に祈り、シャーマン（写真右から4人目）はタン（サラシリ）の山の神にのみ祈る。両者の間にいる二人は、踊り子ブロパ（男性）



写真 14 ラスシでは、羊、ミトウン、赤い雌牛、子供の雄牛、ヤギが生きたまま、それぞれ決まった山の神に捧げられる。



写真 15 シャーマンとその前で舞う踊り子、ブルム Burmu（女性）（白い衣装の右2人）とブロパ Bropa（男性）（左3人）



写真 16 4つの上位クラン「バプー」の人々がそれぞれの神への捧げ物を置いた祭壇の前に座る。写真はディルキッパ・クランの祭壇と人々



写真 17 上位クラン「バプー」の人々が祭壇の前に座り、その後方に下位クラン「ギラ」の人々が座る。写真はディルキッパ・クラン（バプー）とニムソング・クラン（ギラ）（一部アッサムの人が混じっている）

のクランの人は、許可が得られれば採集が可能である。

「ムーン」は「深い森」を意味し、村落と反対側の山の斜面や高度 2400 m 以上など、村落から遠く、近接性の低い森林帯であり、主に建材を集めたり狩猟を行う場所となっている（写真 19）。かつてはこの「ムーン」の森林帯まで人が入って木を切ることは少なく、「一人で入るのは怖い」深く暗い森であった。しかし、近年の人口の増加と道路の整備、車の発達とともに、「深い森」である「ムーン」の森に入る人が増加し、森林が伐採され、陰樹が主体の一次林の「ムーン」の森から、「ブルーパイン（青松）」と呼ばれるヒマラヤゴヨウ（*Pinus wallichiana*）など陽樹が主体となる二次林の「ボロン」の森に遷移している。

しかし、近年チャンバ・シン（*Michelia oblonga*）やマン・シン（*Tsuga dumosa*）やケ・シン（*Juglans regia* var. *kamaonia*）、ワン・シン（*Abies spectabilis*）などが建築材や家具材として有用になり、その利用量の増加とともに伐採量も増えた。なかでもチャンバ・シンは近年商業目的で大量伐採され、デリーやムンバイ、ハリヤーナー州、パンジャブ州、グジャラート州などに輸出されて激減したため、価格の高騰が著しい（表 1）。

1987 年に中央および州政府は商業的樹木伐採の許可証をチャンバ・シン、レンソン・シン、ワン・シン、マン・シンについて発行するようになった。この 4 種および他の種について自分の利用のためなら許可はいらない。しかし、その許可証の発行が森林の大量伐採につながることになる。実際に許可証で伐採可能な量の 10 倍もの樹木が、役人への賄賂によって可能になり、そのため 9 年間で州の森林の約 3 割が消失したと言われている。中央政府の最高裁判所が 1996 年 12 月に、許可証の発行およびすべての森林の商業伐採を禁じる命令を下し、以降、大規模な伐採は止まった。しかし、実際には不法伐採であっても黙認しているのが現状である。

すなわち、クランの森林においては、商業目的の伐採は認めないが、そのクランの人が自分の利用のために伐採するのは認めている。政府はどちらも公には認めないとしているものの、実際には黙認しているというわけである。したがって、この地域ではクランでもチャンバ・シンの伐採は禁

じているが、他の有用材はクランの許可があれば切っているのが現状である。伐採された木材はトラックに積んでその上にカバーをつけて見えないようにして運ばれている。

ディラン地方では、最初に森林の過度の伐採や薬草の乱獲に危機感を感じたのはテンバン村の住民たちだった。ディランなどの町の住民が薪を購入するために、周辺村の住民は現金獲得のため樹木を伐採し、また薬草はとくに根が薬になるため文字通り根こそぎ取っていった。テンバン村でも同様であった。かわりの現金獲得手段がなければ伐採や乱獲は止まらない。しかし、近年の環境保護運動の高まりや WWF の指導の影響を受け、テンバン村の住民は収入を維持したまま、自然保護を進める方法を検討した。そして、WWF とともに CCA（Community Conserved Area）プロジェクトを発想し、それに WWF が協力することになった。WWF 事務所はイタナガールからディランに移転し、住民支援を開始した（2010 年から WWF 事務所は再度テズプールに移動）。この CCA プロジェクトは 2004 年に設立され、2007 年から本格活動が始まった。WWF はドラブジイ・タタ・トラスト Dorabji Tata Trust から資金援助を受けることができ、この活動は始動することができた。プロジェクトではテンバン村内の 3 軒のそれぞれの家の一室を観光客のためのゲストハウスとして整備し、観光客にトレッキングを提供する準備や訓練も行った。それらの収入で、これまでの伐採による収入を補填していこうとしている。

このプロジェクトでは薪の伐採を減らすために、ヤクの糞の利用を再び進めている。モンパ地方ではかつてはヤクの糞を乾燥させて燃料として利用していたが、煙がたくさん出ることや、伐採して得た薪のほうが手軽に利用できるため、森林限界以上の草原を除き、近年はヤクの糞が利用されることはなくなった。そのヤクの糞の利用を進めるため、ヤクの糞から燃料を作成する器具が発案された（写真 21）。最初にヤクの糞を燃やして炭にし、それを機械に投入すると炭が固められて棒状の燃料が作成される。この機械の作製費は 1 台あたり 1 万 6 千ルピーで、WWF から無償で CCA に提供されている。

ディランゾン地区では森林を伐採してゴルフ場をつくる計画も持ち上がった。しかし、住民の自

表1 有用材 1C・F・Tあたりの値段の推移

年	チャンバ・シン	レンゾン・シン	マン・シン	ワン・シン	ケ・シン
1987	100	60	60	60	—
2009	200	200	200	200	300
2010	500	250	250	250	300
2011	500	300	300	300	400

1C・F・T=12フィートx12インチx1インチ
現地での聞き取りより作成



写真18 村の畑に接して「ソエバ・シン」と呼ばれる「コナラの落葉を集める森林」が存在し、その周囲にヒマラヤゴヨウなどからなる「ボロン」と呼ばれる「薪を集める森林」がある。



写真19 主に常緑針葉樹からなる高標高の「ムーン」と呼ばれる森林地帯。



写真20 トウモロコシ畑に播かれているコナラの落葉（テンバン村）。トウモロコシ畑の雑草を生えにくくするためや肥料として、また土壌浸食を押さえるために用いられる。



写真21 ヤクの糞の利用を進めるため、ヤクの糞から燃料を作成する器具（写真はWWFのPijush氏提供）。最初にヤクの糞を燃やして炭にし、それを機械に投入すると炭が固められて棒状の燃料が作成される。

らの環境を守る意識も高まり、住民たちの「大きな」そして「重要な」山の保護に力を注ぐように変化していったのである。

謝辞

本研究は、総合地球環境学研究所のプロジェクト「人の生老病死と高所環境：高地文明における医学生理・生態・文化的適応」（代表者：奥宮清人）、三井物産環境基金「研究助成」「荒廃熱帯林の修復と森林とともにくらす地域住民の生活に関する研究」（平成 20-22 年度）（研究代表者：小林繁男）、平成 22 年度京都大学コアステージバックアップ「気候的限界域における環境変動と植生変化の応答に関する地域的比較研究」（水野一晴）、平成 23 年度科学研究費（挑戦的萌芽研究）「南アルプスにおける「お花畑」の数十年スケールでの環境－植生動態」（水野一晴）、平成 19 年度科学研究費補助金（基盤 A）「プラマプトラ川流域における農業生態系と開発－持続的発展の可能性－」（研究代表者：安藤和雄）の一部を使用した。本研究では、Mr. Passang Tsering、Mr. Rinchin Tsering、Mr. Ahuja、Mr. Pijush Kumar Dutta、田中孝明氏をはじめ多くの方のご協力を得て調査が可能になった。ここに記してお礼申し上げます。

参考文献

- 1) Kri, S.: (ed.) State gazetteer of Arunachal Pradesh. Government of Arunachal Pradesh, Itanagar. 2010.
- 2) Gopalakrishanan: Arunachal Pradesh (land and people), Omsons Publications, New Delhi, 1994.
- 3) 水野一晴（奥宮清人編）：森林分布と人間活動（生老病死のエコロジー），昭和堂，京都，2010: 100-104.
- 4) スネルグローブ，デイヴィッド&リチャードソン，ヒュー（奥山直司訳）：チベット文化史，春秋社，東京，1998.
- 5) Dhar, Bibhash: Arunachal Pradesh, The Monpas of Tawang in Transition, Geophil Publishing House, Guwahati, 2005.
- 6) Norbu, Tsewang: The Monpa of Tawang, Government of Arunachal Pradesh, Itanagar, 2008.
- 7) 山口瑞鳳：チベット（下）（改訂版），東洋叢

書，東京，2004.

- 8) Vandai Wonggaindey: Gairab Sailvai Mailong（パーリ語），Norbu Tashi によってチベット語に翻訳，Tashigang，（年代不明）.

Summary

The Role of the “Mountain” for Monpa People in Arunachal Pradesh, India

Kazuharu Mizuno

Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

The role of the “Mountain” for Monpa people has been surveyed in Arunachal Pradesh, India. As a result, mountains serve three kinds of roles for the Monpa people.

1. The mountain delineates the border of tribes, cultures, and societies. Arunachal Himalaya (Assam Himalaya) has played the role of obstacle for interaction between Tawang Monpa and Dirang Monpa, and each unique language, culture, and society has developed independently. The mountain also plays the role of natural fort, because the Indian Army has been stationed on a large scale there since the Chinese Army attacked Arunachal Pradesh in 1962.
2. The Monpa people traditionally follow the Bon religion in addition to Tibetan Buddhism. In Bon religion, mountains have been worshipped as mountain gods for ages. Mountain gods are particular to each area and local people pray and give ritual offerings to their mountain gods in ceremonies. The ritual offering each time consists of livestock and/or young girl. The difference between high clans and low clans is observed in this ceremony.
3. The mountain is important for the Monpa people as a natural resource, as they harvest timber from the mountain. The forest has been classified into three categories and the purpose for use is different in each forest. Deforestation is recently accelerated by large-scale logging practices. Although commercial cutting was prohibited by the central government, illegal cutting continues even now. As local people developed a sense of crisis, a movement to preserve the forests arose with new ideas, including cultivating eco-tourism.

Keywords: Arunachal Pradesh, Monpa people, role of mountain